

育児不安に関する要因の検討

八幡裕一郎* 畑 栄一^{2*}
佐藤千枝子^{3*} 岩永 俊博^{4*}

目的 近年我が国においては、育児中の母親をとりまく環境が育児不安を高めるものとなっているといわれている。このような環境の変化に対応する要因についてこれまでも報告があるが、これらは不安の尺度に対して計量的検討がなされていなかった。そこで、国内で広く用いられている尺度を基にして、計量的検討を経た育児不安尺度を構成し、育児不安と「父親の育児への不参加」などの育児不安の要因といわれている項目との関連をみることにした。

方法 育児不安尺度の計量的検討に関しては、心理学、教育学、社会学および体育学などの分野で、主観的評価に対する構造分析法でかつ、非線形的な領域についての検討に用いられている多次元尺度法を用いた。この方法により、概念領域と計量的に求められた領域との比較を行い、尺度の妥当性を検討したのち、尺度の構成を行った。内的整合性の検討には、Cronbachの α 係数を用いた。育児不安とその要因の項目との関連の強さを相関係数を用いて検討することとした。

成績 Cronbachの α 係数は0.77と高く、尺度と各項目との相関係数も最低0.46、最高0.70と安定しており、この尺度は良好であると考えられた。そこで、この尺度を用いて育児不安とその要因といわれている項目との関連性の強さを検討した。重回帰分析によって決定係数を算出したところ、0.12と小さかった。また、母親の demographic factor によって育児不安の程度に差がみられたものについて層化を行い、育児不安と要因といわれる項目の重回帰分析において決定係数および相関係数を算出した。重回帰分析では、子供4人以上の場合のみ1,459件中28件と少なかったが、決定係数が0.63と高く、標準偏回帰係数も絶対値で0.52から0.37となっていた。相関係数は0.30以上のものが216項目中わずかに14項目しかみられず、すべての層に対して相関係数が0.30以上のものはなかった。

結論 これらの結果から、近年育児不安を高める要因として繰り返し指摘される要因のみでは、育児不安のほとんどの部分が説明されないと考えられた。ただし、4人以上の子供を持つ家庭では、「母親の余裕」が育児不安をある程度減らすものとしての関連が明らかとなった。よって、これまでにたびたび指摘をされてきた育児不安の要因だけでは保健活動として不十分なものであると考えられた。今後、育児不安の要因を検討するにあたり、家庭での育児不安の解消にはより幅広く育児不安の要因を包括的にとらえ検討する必要があると考えられる。

Key words : 育児不安, 尺度構成, 多次元尺度法, 育児不安要因

I はじめに

近年我が国の大都市およびその近郊において、

育児中の母親を取り巻く環境は変化してきている。例えば、核家族化、人口の流入流出が頻繁になって起こるであろうと考えられる地域における家族同士の交流の不活発化および孤立化などが挙げられる^{1~4)}。さらに、1990年頃より育児不安に関する商業誌に母親が公園へ子供を連れて初めて行くこととして「公園デビュー」といったものが取りあげられはじめられた。この記事では、公園に

* 長崎大学医学部公衆衛生学教室

^{2*} 国立公衆衛生院保健統計人口学部

^{3*} 八千代市保健センター

^{4*} 国立公衆衛生院公衆衛生行政学部

連絡先：〒852-8523 長崎市坂本 1-12-4

長崎大学医学部公衆衛生学 八幡裕一郎

来ている母親達の会話に参加できるようになるまでに時間がかかるといったことがいわれていた⁵⁾。このようなことは育児中の母親がゆとりをなくし、育児に対する不安を高めるものとなっていると考えられる。

育児中の母親の不安を高めているといわれる家庭状況に対応する要因について検討を行うことを考えた。例として要因を挙げてみると、「父親が子供の世話をすること」といった家庭状況などが育児不安に影響を与えるものとして報告がある^{6~14)}。しかし、これらの報告における育児不安の把握はCase Studyなどであった。よって、計量的な検討をされたものを尺度として用いられているものではなかった。

育児不安の計量的把握のために国内外の育児不安に関する報告を保健分野でよく使用されているデータベースのMEDLINE および医学中央雑誌と、心理学分野でよく使用されているデータベースのPsycLitを用いて検索をした。その結果^{15~18)}(表1)、目的とする育児不安の周辺領域にある尺度はいくつかみられたが、目的とするものではなかった。また、国内でも牧野による報告⁷⁾が広く用いられていたが、思弁的に作成された尺度であったため計量的検討を加える必要があると考えられた。

よって、これら指摘されてきた要因が本当に育児不安の要因として関連をしているか否かを検討せずに施策としての保健指導や家庭内での援助を行っている状況である。このような状況では、関連性を持たない要因について保健指導および援助が行われている可能性が考えられ、これらの行為が無駄な実践になる危険性があった。

本研究では、公園で遊ぶようになる頃の子供達を持つ母親の育児不安に対して計量的検討を経た尺度を構成し、この尺度を用いて育児不安の要因との関連性をみることにした。

II 研究方法

1. 調査対象および調査方法

1) 調査対象

東京近郊の都市に在住で、2歳から3歳6カ月までの子供を持つ2,302世帯(1994年10月31日現在)の両親を対象とした。

表1 育児に関する尺度の検索結果

-
- Hughes RN & Hawkins AB.¹⁵⁾
 - Spielberger et al.¹⁶⁾
 - Taylor.¹⁷⁾
 - Jeffrey S. Levin.¹⁸⁾
 - 牧野カツコ⁷⁾
-

2) 調査方法

調査期間は、1994年11月15日から11月25日までの11日間であった。調査方法は、自記式調査票を郵送し、回答後郵送で返却をするものとした。

3) 調査内容

質問項目として、①育児不安の尺度に関する項目、②demographic factorに関する項目および③育児不安に影響する要因に関する項目を取り上げた。

(1) 育児不安の尺度に関する項目

牧野による尺度⁶⁾から取り上げた育児不安尺度項目を一部改訂し、3概念領域より構成されているものとした。この概念領域には、①「育児をすることのゆとり」として8項目(anx 1, 2, 4, 5, 6, 8, 9, 11)、②「母親の時間のゆとり」として3項目(anx 3, 7, 12)、③「母親が子供に対するゆとり」として3項目(anx 10, 13, 14)の計14項目を育児不安の尺度項目とした。各項目の内容は表2の通りである。

(2) demographic factorに関する項目

demographic factorは「母親の年齢」、「母親の職業」、「子供の数」、「父方祖父母の距離」、「母方祖父母の距離」、「育児のことについて友達と話す内容」、「居住年数」の7項目とした(表3)。

(3) 育児不安の要因に関する項目

育児不安の要因に関する質問項目は、①父親が子供の世話をすることに関するもの、②母親が息抜きをすることに関するもの、③育児の話をするることおよび④母親が子供と接する機会に関するものについて9項目とした。各項目の内容は、表4の通りである。

2. 育児不安の尺度に関する検討

1) 育児不安の尺度の検討方法

計量的検討を行う育児不安の尺度の項目は、概念的に分類されている領域各群中の質問項目が2項目と少ないものもあり、個々の概念領域に対し

表2 育児不安の尺度に関する項目

<anx 1>	ゆとりを持って育児をしていると思うか
<anx 2>	子供と過ごす毎日は楽しいか
<anx 3>	父親は入浴、着替え、食事を食べさせるなどの世話をするほうだと思えるか
<anx 4>	自分一人で子供を育てているという圧迫感を感じてしまうことがあるか
<anx 5>	子供を育てるために我慢ばかりしていると思うか
<anx 6>	毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思うか
<anx 7>	父親と一緒に育児をしているという実感はあるか
<anx 8>	子供のことでどうしたらよいか分からなくなることがあるか
<anx 9>	子供のことが煩わしくイライラしてしまうことがあるか
<anx 10>	子供は結構ひとりりで育っていくものと思うか
<anx 11>	育児によって自分が成長していくと感じるか
<anx 12>	母親が友達と自分の時間を持つことについてどう思うか
<anx 13>	子供に本を読んだり話を聞かせたりすることに対する気持ち
<anx 14>	子供がどろんこになって遊ぶことに対する気持ち

て検討するには困難であると考えられた。そこで、同一領域として考えられるものをまとめ3領域が育児不安を構成している概念として捉えるものとして、計量的検討を行うこととした。

尺度に関する検討は、これまで主成分分析、因子分析、多次元尺度法などが用いられて来た^{19)~25)}。主成分分析および因子分析は、軸の回転によって因子等の解釈が容易になるという利点がある。しかし、軸の回転は、先に挙げた利点と共に「データに対する説明力は変わらないが、因子の解釈は大きく変わる」場合があることや、「因子分析の解の不定性は、あるデータをどの様に眺めるかという観点の違いを反映していることに当たる」場合があるということが注意点として指摘されている²⁵⁾。一方、多次元尺度法は、項目間の類似性を距離で表し関連性を位置づけるものである。そのため多次元尺度法は、主成分分析および因子分析の場合と異なり観点の違いによる差が生

表3 demographic factorに関する項目

• 母親の年齢
• 母親の職業
• 子供の人数
• 祖父母の距離 (父方および母方)
• 育児のことについて友達と話す内容
• 居住年数

表4 育児不安との関連要因の質問項目

① 父親が子供の世話をする
• 父親が入浴や着替えなどの子供の世話をする頻度 ⁴⁾ (要因1) ^a
• 父親が子供と戸外で遊ぶ頻度 ⁴⁾ (要因2) ^a
② 母親が息抜きをすること
• 子供を預けて両親だけで外出する頻度 ⁴⁾ (要因3) ^a
• 母親が自分の時間をとれる頻度 ⁴⁾ (要因4) ^a
• 母親が自分の時間をとるために子供を預けられるかどうか ⁴⁾ (要因5) ^b
③ 育児の話をする
• 母親が育児のことについて友達と話をすること ⁴⁾ (要因6) ^a
• 父親と子供のことについて話す頻度 ⁴⁾ (要因7) ^a
④ 母親が子供と接する機会に関すること
• 母親が子供と戸外で遊ぶ頻度 ⁴⁾ (要因8) ^a
• 母親が子供に本を読んだり話をすること ⁴⁾ (要因9) ^a

a: 回答項目が肯定的な方が大きい

b: 回答項目が否定的な方が大きい

じるという問題を避けることができると述べられている¹⁹⁾。各手法の特性を考慮し、本研究では多次元尺度法を用いることとした。

多次元尺度法は、各質問項目の類似性を空間上において距離の近さで表すものである。各質問項目の空間配置に当たり、あらかじめ配置に適切な次元を算出する。本研究では、育児不安を3つの領域より構成されていることが考えられたが、各領域の項目数が均一でないことから2次元で配置し、各領域の集まり具合を検討することとした。

構成をした尺度に関する信頼性については、内的整合性の検討としてCronbachの α および尺度とそれを構成する質問項目との間の相関をみることとした。

これらの統計的検討には、統計パッケージ SPSS for Windows を使用し、多次元尺度法には各項目間の距離によって非類似性を計量的に項目の配置をする Alscal Procedure^{19,23)}を用いた。

3. 育児不安の要因の検討

1) 育児不安の要因の質問項目

母親をとりまく状況のうち、近年育児不安を高める要因として繰り返し指摘されているものがある。今回取りあげた育児不安の要因は、「父親が子供に食事を食べさせたり着替えをさせる」^{6,7,11)}、「父親が子供と遊ぶ」⁶⁾といった世話に関するもの、「母親の趣味、母親自身の時間」⁶⁾といった母親自身の生活のあり方、「近所の人に子供を預ける」⁶⁾といった近所づきあい、「子供のことについて話をする友人」^{6,10,12,13)}、「父と母が子供のことについて話をする」^{6,8,9,12,14)}、「子供と戸外で遊ぶ」⁶⁾などの7項目である。また、調査をする市内の母子保健推進員によると「母親が子供と公園で遊ぶ」および「母親が子供に本を読む」も重要であるという指摘があったためこれら2項目を含めた9項目を育児不安の要因として検討することにした。

2) 育児不安の要因検討方法

これまで、育児不安とその要因といわれる項目の関連については、個々の要因と育児不安とが無関係であるとの帰無仮説が否定されてきている。そのため、はじめに育児不安の要因9項目が育児不安に対して包括的に関連している度合いをみることにした。次いで、育児不安とその要因各々との関連の強さの度合いをみることにした。

まず、育児不安と9要因の包括的な関連についての検討は、重回帰分析を行うことにした。重回帰分析は、従属変数を育児不安とし、説明変数を育児不安の9要因すべてとした。包括的な関連の強さの度合いの指標は、決定係数を算出することとした。重回帰分析は、決定係数の算出に当たり「全変数を投入した場合決定係数の値が大きくなるが、重回帰式の安定性は悪くなる場合がある」と指摘されている²⁴⁾。ここでは式の安定性を重視し、重回帰分析は変数減少法を用いて説明変数を絞り込むことにした。

育児不安の個々の要因と育児不安の関連についての検討には、相関係数をとることとした。

母親の背景因子が交絡因子になる可能性がある

ため層化をする事により解釈の困難が予測されたので、交絡因子の影響を取り除くことを優先した。そこで、母親の demographic factor に対して一元配置分散分析を行った結果差がみられたものに関してのみ重回帰分析および相関分析で層化を行う事とした。これにより、育児不安と育児不安の包括的な関連および各要因毎の関連の強さの度合いをみることにした。

なお、これらの検討に関して、統計パッケージ SPSS for Windows を使用した。

III 結 果

1. 調査の回収結果

調査用紙は郵送した2,302世帯中1,459世帯より回収され、回収率は63.4%であった。

2. 育児不安の尺度検討結果

Alscal Procedure により尺度に関する質問項目を2次元空間に配置したものを図1に示した。質問項目 anx 1, 2, 4, 5, 6, 8, 9, 11の「育児をすることのゆとり」に関する領域の8項目のみがまとまっていた。そこでこれら8項目を育児不安尺度の構成要素として用いることにした。

構成した尺度の信頼性係数 (Cronbach の α 係数) は0.77となった。また、表5のように尺度と各項目との相関係数は、最低0.46、最高0.70となった。

尺度の点数化には、「育児をすることのゆとり」に関する領域のみであった。各質問項目にはそれぞれ4つの選択肢のうち、最も肯定的な回答項目を4点とし、最も否定的な回答項目を1点とした。これらの合計点を育児不安の尺度とし、点数化をすることにした。構成した育児不安尺度は、点数が低い場合不安が高いということになり、最高32.0点、最低9.0点、平均点が21.7点であった。

3. 育児不安の要因検討結果

1) 重回帰分析

重回帰分析をした結果、育児不安の要因すべてを説明変数として用いることにより算出された決定係数は0.12であった。また、標準偏重回帰係数は、絶対値で0.04から0.18であった。

2) 層化した相関分析

demographic factor 毎の育児不安の違いは、一元配置分散分析を行った結果、表6のとおりとなった。これより、7項目ある demographic factor

図1 多次元尺度法による分類結果

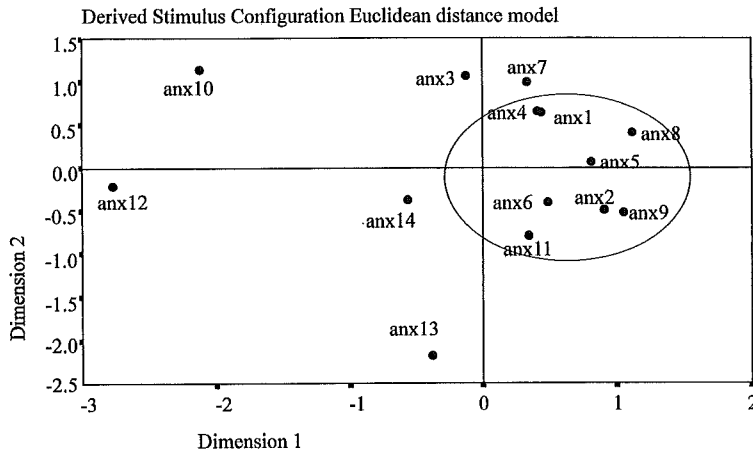


表5 質問項目と育児不安尺度の相関

Stimulus Name	Correlation
anx 1	0.58**
anx 2	0.64**
anx 4	0.66**
anx 5	0.70**
anx 6	0.66**
anx 8	0.59**
anx 9	0.69**
anx 11	0.46**

**： p<0.01

のうち、「父方祖父母の距離」以外の6項目が $p < 0.05$ で有意な差がみられた。そこで、「父方祖父母の距離」を除く6項目に関して項目別に層化をし、育児不安とその要因との相関係数をとることにより育児不安とその要因との関連の強さをみた結果は、表7から表12の通りである。これらの表より、相関係数が0.30以上のものは216項目中わずか14項目しかみられなかった。また、層化されたどの層に対しても0.30以上の相関を示す要因項目はなかった。

3) 層化した重回帰分析

一元配置分散分析の結果において差のあった6項目を層化し重回帰分析を行った結果は、表13の通りとなった。これより、重相関係数は、0.29から0.63であった。

IV 考 察

1. 育児不安尺度検討の考察

図1に多次元尺度法で分類された項目より、尺度として用いた8項目 (anx 1, 2, 4, 5, 6, 8, 9, 11) は、「育児をすることのゆとり」についての領域の項目のみで構成されている。このことから育児不安の尺度は、構成された8項目について重み付けをすることなく加算することで尺度構成方法として妥当であると考えられる。

構成した育児不安尺度の信頼性係数 (Cronbachの α 係数) は0.77と高く、尺度と尺度を構成する各項目との間の相関係数が0.46から0.70と高く安定していた。そこで、妥当性および信頼性の検討の結果から、構成した尺度は良好なものであると考えられ、育児不安を表すものとなっていた。

構成した尺度の項目は、「育児をすることのゆとり」の項目についてのみ用いられていることから、本研究で捉えようとした育児中の母親がゆとりをなくし、育児に対する不安についての尺度として表しているものとなっていた。

2. 育児不安の要因検討の考察

重回帰分析の結果、育児不安とこれまでいわれてきたその要因項目^{6~14)}すべての包括的な関連の度合いが低かった。これより、今回検討を行った要因が育児不安に対してかなり弱い関連しかなかった。

表6 母親の demographic factor 別一元配置分散分析の結果

Demographic factor (属性)	育児不安得点			LSD Test	F 値 p 値
	人数	平均	標準偏差		
年齢					
24歳以下	76	21.2	3.5	} * } * } * } *	F=4.24 p=0.005
25歳以上30歳未満	409	21.3	3.5		
30歳以上36歳未満	735	21.7	3.3		
36歳以上	198	22.3	3.7		
子供の人数					
1人	446	22.0	3.5	} * } * } * } *	F=6.06 p=0.000
2人	724	21.3	3.4		
3人	220	22.0	3.4		
4人以上	28	23.1	4.3		
父方祖父母との距離					
同居	619	21.5	3.5		F=1.07 p=0.361
歩いて行ける距離	420	21.8	3.4		
電車・バスなどで行ける比較的近距离	141	21.5	3.5		
比較的離れた距離	181	21.9	3.4		
母方祖父母との距離					
同居	526	21.5	3.5	} * } * } * } *	F=5.48 p=0.001
歩いて行ける距離	612	21.5	3.3		
電車・バスなどで行ける比較的近距离	159	22.2	3.2		
比較的離れた距離	90	22.8	3.8		
育児のことについて友達と話す内容					
友達と育児の悩みや不安を話す	1,116	21.9	3.3	} * } * } * } *	F=7.34 p=0.000
友達と育児の話はするが悩みや不安までは話さない	227	21.0	3.4		
友達と話はするが育児の事や、悩み、不安について話さない	36	21.8	3.9		
話をする友達はいない	35	19.9	3.9		
母親の職業					
常勤	128	22.5	3.2	} * } * } * } *	F=4.39 p=0.004
パート	73	21.5	3.4		
家業	44	22.6	3.0		
専業主婦	1,114	21.5	3.5		
居住年数					
1年未満	144	21.4	3.7	} * } * } * } *	F=2.74 p=0.042
1年以上3年未満	293	21.4	3.5		
3年以上10年未満	656	21.6	3.3		
10年以上	324	22.1	3.6		

*: p<0.05

個別の検討を行う際に、母親の demographic factor の項目毎に層化し交絡因子を取り除き、育児不安とその要因の関連のみを取り出せると考え、母親の demographic factor の項目毎に層化を行った。その結果（表7から表12）相関係数が

0.30以上のものがわずか14項と少ないことや、すべての層にわたって0.30以上の相関を示す要因項目がないことから、ほとんどの要因といわれる項目が育児不安に対してかなり弱い関連しかなかった。

表7 母親の年齢別育児不安とその要因の関連

	母 親 の 年 齢		
	30歳未満	30歳以上35歳未満	36歳以上
要因1	-0.18***	-0.13***	-0.20***
要因2	-0.10*	-0.02	0.023
要因3	-0.07	-0.11*	-0.21*
要因4	-0.17***	-0.16***	-0.25***
要因5	-0.04	0.02	-0.15
要因6	0.07	0.08	0.12
要因7	-0.27***	-0.18***	-0.22***
要因8	-0.04	0.03	-0.02
要因9	-0.22***	-0.15***	-0.35***

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

表8 母親の職業別育児不安とその要因の関連

	母 親 の 職 業			
	常勤	パート	家業	専業主婦
要因1	-0.33**	-0.25*	-0.19	-0.15***
要因2	-0.17	-0.43***	0.23	-0.01
要因3	-0.08	-0.16	-0.10	-0.09**
要因4	-0.30**	-0.16	-0.37*	-0.14***
要因5	-0.01	0.01	-0.13	0.01
要因6	-0.01	0.19	-0.15	0.10**
要因7	-0.31**	-0.29*	-0.28	-0.21***
要因8	-0.18	-0.23	-0.10	-0.02
要因9	-0.28*	-0.12	-0.25	-0.18***

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

表9 子供の人数別育児不安とその要因の関連

	子 供 の 人 数			
	1人	2人	3人	4人以上
要因1	-0.19***	-0.18***	-0.14	-0.13
要因2	-0.04	-0.07	0.02	-0.06
要因3	-0.02	-0.08*	-0.29***	-0.35
要因4	-0.15**	-0.15***	-0.31***	-0.37
要因5	-0.05	0.04	-0.04	0.04
要因6	0.16**	0.04	0.12	-0.07
要因7	-0.24***	-0.22***	-0.20*	-0.13
要因8	0.024	0.022	-0.03	-0.02
要因9	-0.13**	-0.22***	-0.26***	-0.24

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

表10 母方祖父母との距離別育児不安とその要因の関連

	母方祖父母との距離			
	同居	歩ける距離	簡単に行ける距離	比較的遠いところ
要因1	-0.15**	-0.22***	-0.16	-0.02
要因2	-0.05	-0.10*	-0.03	0.19
要因3	-0.10	-0.04	-0.03	-0.45*
要因4	-0.16***	-0.14**	-0.24*	-0.35*
要因5	0.03	0.03	-0.15*	-0.16
要因6	0.14**	0.09	-0.11	0.14
要因7	-0.23***	-0.29***	-0.08	-0.13
要因8	0.05	-0.08	-0.01	0.03
要因9	-0.24***	-0.14**	-0.24**	-0.33**

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

表11 育児のことについて友達と話す内容別育児不安とその要因の関連

	育児のことについて友達と話をの内容			
	悩みや不安を話す	育児の話はするが悩みや不安は話さない	育児の話や悩み不安は話さない	話をする友達はいない
要因1	-0.17***	-0.19***	-0.22***	-0.17
要因2	0.07*	-0.05*	-0.09*	-0.04
要因3	-0.09	-0.16	-0.02	0.03
要因4	-0.19***	-0.12***	-0.33***	-0.02**
要因5	0.04	-0.11	0.12	-0.12
要因6	-0.22	-0.20	-0.12	-0.14
要因7	-0.06***	-0.02***	-0.01***	0.19
要因8	-0.02	-0.01	0.37	-0.06
要因9	-0.20***	-0.21***	-0.13***	0.24

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

表12 居住年数別育児不安とその要因の関連

	居 住 年 数			
	1年未満	1年以上3年未満	3年以上10年未満	10年以上
要因1	-0.12	-0.23***	-0.13***	-0.20
要因2	0.07	-0.05	-0.09	-0.04
要因3	-0.10*	0.06	-0.14*	-0.15**
要因4	-0.16*	-0.13	-0.18***	-0.23***
要因5	0.14	0.02	0.01	-0.09
要因6	0.16	0.09*	0.08	0.06
要因7	-0.26***	-0.29***	-0.20***	-0.20
要因8	-0.01	-0.09	0.05	-0.06
要因9	-0.37***	-0.19***	-0.17***	-0.20*

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

表13 重回帰分析の結果

Demographic factor (属性)	標準偏回帰係数									重相関 係数	TEST F-Value
	要因1	要因2	要因3	要因4	要因5	要因6	要因7	要因8	要因9		
母親の年齢	-0.06	-0.03	0.04	-0.08†	0.07	0.06	-0.23***	-0.02	-0.16***	0.33***	19.103
30歳以上36歳未満	-0.07	-0.03	-0.04	-0.09†	0.05	0.05	-0.24***	-0.02	-0.16**	0.34**	17.298
36歳以上	-0.06	0.07	-0.03	-0.16***	0.06	0.05	-0.17***	0.09	-0.16***	0.29**	21.554
子供の人数	0.09	-0.02	0.04	-0.09†	-0.03	0.10*	-0.22***	0.02	-0.13**	0.33**	12.866
2人	-0.13**	0.02	-0.04	-0.17***	0.09*	0.03	-0.14***	0.04	-0.20***	0.36**	20.024
3人	-0.07	0.01	0.10	-0.24***	0.13†	0.02	-0.15*	-0.06	-0.23***	0.37**	8.090
4人以上	-0.08	0.12	-0.52**	-0.24	0.37*	-0.02	-0.07	0.04	-0.46**	0.63*	5.288
母方祖父母	-0.03	0.03	-0.04	-0.10**	0.08	0.09*	-0.25***	0.08	-0.12***	0.35**	13.940
歩いて行ける	-0.07	-0.11*	0.05	-0.10*	0.07	0.05	-0.19***	-0.06	-0.09**	0.29**	12.620
電車・バス	-0.14	0.05	0.07	-0.24**	0.18*	-0.11	-0.21*	-0.01	-0.21*	0.40**	9.419
比較的近い距離	-0.12	0.07	-0.20*	-0.12	-0.04	-0.04	-0.07	-0.04	-0.27**	0.37**	5.751
母親の職業	-0.25**	0.03	0.06	-0.29***	0.02	0.02	-0.07	0.02	-0.23*	0.44**	8.399
常勤	0.02	-0.39***	0.18	-0.08	-0.04	0.13	-0.22†	-0.16	-0.10	0.50**	10.294
パート	0.07	0.15	0.03	-0.32*	0.15	-0.13	-0.14	-0.10	-0.14	0.32*	4.787
家業	-0.05	0.03	-0.03	-0.11***	0.06†	0.06*	-0.18***	0.04	-0.18***	0.31**	22.868
専業主婦	-0.03	0.12†	-0.09	-0.14†	0.15*	-0.01	-0.23**	0.02	0.11*	0.39**	6.408
居住年数	-0.10†	0.05	0.08	-0.08†	0.05	0.11*	-0.22***	0.02	-0.24***	0.41**	13.883
1年未満	-0.08†	-0.04	0.02	-0.18***	0.08*	0.07	-0.10*	0.01	-0.11***	0.32**	14.543
1年以上3年未満	-0.22**	-0.02	-0.24**	-0.15†	0.07	-0.01	-0.13	-0.06	-0.25**	0.48**	8.629
3年以上10年未満	-0.08**	0.01	-0.02	-0.16***	0.07**	0.05†	-0.15***	0.07	-0.18***	0.34**	29.800
10年以上											
層化せず											

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001, †: p<0.1

層化をした場合の重回帰分析の結果(表13)から、重回帰係数は最低が0.29, 最高が0.63で、各層において共通の選択された要因がみられなく、標準偏回帰係数の絶対値も0.52が最高で、0.30以上のものがわずか5つしかなかった。この5つのうち3つは、4人以上子供がいる場合であった。この場合の決定係数は、0.63と検討したものの中では最大で、標準偏回帰係数も絶対値で0.37から0.52とすべての要因の標準偏回帰係数が0.30以上であった。他の層化した群には決定係数と標準偏回帰係数が共に高いということはみられなかった。これより、子供を預けて両親だけが外出する頻度が多く、母親が自分の時間をとるために子供を預けられ、子供に本を読んでやる頻度が多いと育児不安が少ないということについて弱い関係性は考えられた。しかし、対象者数が1,459人中28人(1.9%)と少なく、標準偏回帰係数も0.37から0.52と低いため全体的に考えるとこの場合だけを重視することはできない。よって、4人以上の子供を持つ場合のみに関して「母親の余裕」ということの重要性を完全には否定できないものの、インパクトが弱い最優先すべき事項ではない。

育児不安と今回検討をした「父親が入浴や着替えなどの子供の世話をする頻度」、「父親が子供と戸外で遊ぶ頻度」、「子供を預けて両親だけで外出する頻度」、「母親が自分の時間をとれる頻度」、「母親が自分の時間をとるために子供を預けられるかどうか」、「母親が育児のことについて友達と話をする」、「父親と子供のことについて話す頻度」、「母親が子供と戸外で遊ぶ頻度」、「母親が子供に本を読んだり話をする頻度」といった育児不安の要因との間には重要視するほどの強い関係は存在しなかった。よって、要因としてこれまで指摘されてきたものは、育児不安との関連性として重要視すべきものではないということが明らかになった。本研究で取り挙げた要因では効果的な保健指導が行えていなかったり、家庭内での育児不安を根本的な解消とはなっていないということが考えられ、無駄な実践を行っていることになりかねないため早急に要因を再検討する必要がある。

今後、効果的な保健指導や家庭内で育児不安の軽減を行うために、十分に効果のある育児不安解消の要因をできるだけ早急に検討する必要がある。

。そのためには、育児不安の要因を柔軟により広く包括的に要因を検討する必要があると考えられた。例えば、祖父母が子供と遊ぶことや子供を家族に預けたりすることなどの「家族が育児の手伝いをする」という要因が、育児不安と関連があまりないといった報告²⁶⁾や、島田ら²⁷⁾のように育児不安の要因が「児の問題」、「母親の問題」、「家族機能と支援」、「育児技術」、「母親の対処能力」、「地域社会の資源」などの5つの側面としてとらえている報告もこれを裏付けていよう。

V ま と め

これまで国内で広く使われてきた育児不安の尺度に対して計量的検討を行って新たな尺度を構成した。また、この尺度を用い、これまで育児不安の要因としてよく指摘される因子との関連性の強さを重回帰分析および相関係数によりみた。これらによる結果は、以下の通りである。

- ① 今回構成した尺度は、妥当性および信頼性の検討からみて良好なものと考えられた。
- ② たびたび指摘される「父親が子供の世話をする」などのこれまでにいわれてきた要因との関連性を検討した結果、子供が4人以上の場合は弱い関連がみられたが、対象人数および回帰係数から重要視すべきものではなかった。それ以外についても関連がほとんどみられなかった。よって、今回検討をした要因についてのみ保健指導および家庭内で実践するだけでは育児不安の十分な解決にはならない。そこで、育児不安の要因を幅広く包括的に検討する必要があると考えられた。

御校閲して頂いた長崎大学医学部公衆衛生学教室、竹本泰一郎教授に厚く御礼申し上げます。

(受付 '97. 8. 4)
(採用 '99. 5. 17)

文 献

- 1) 総務庁統計局編. 第44回日本統計年鑑, 東京; 日本統計協会, 毎日新聞社, 1995.
- 2) 梶マサエ. 家族の変動と母性をめぐる精神不安定要因. 助産婦雑誌, 1982; 36: 32-38.
- 3) 我部山キヨ子. 精神面からの援助(育児不安)ペリネイタルケア, 1989; Vol. 8 冬季増刊号: 1644-1651.
- 4) 織田正昭. 特集 新しい視点Ⅲ 最近の育児に対

- する問題と対応 1 都市化と育児. 小児科臨床, 1993, 46(4): 255-263.
- 5) おっかなビックリ公園デビュー. プチタンファン, 1990; 4: 106-110.
- 6) 牧野カツコ. 乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要, 1982; 3: 34-56.
- 7) 牧野カツコ. 乳幼児を持つ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—. 家庭教育研究所紀要, 1985; 6: 11-24.
- 8) 田戸 静. 育児不安への対応. 周産期医学, 1987; 17(6): 909-912.
- 9) 加藤忠明. 子育ての小児科学 育児不安. 小児科診療, 1987; 50(1): 72-76.
- 10) 芹沢茂登子. 電話相談からみた親子関係. 周産期医学, 1983, 13(12) 臨時増刊号: 462-465.
- 11) 飯島久美子, 松園典子, 大日向雅美, 他. 母親に対する育児に関するアンケート調査から—母親の就労, 夫の協力, 祖父母との関わりと母親の意識—. 小児保健研究, 1991, 50(1): 16-19.
- 12) 木村かおる, 他. 産褥1カ月間の母親の不安の解消度について. 母性衛生, 1993; 34(2): 169-178.
- 13) 大日向雅美. 育児に伴う母親の不安. 小児看護, 1989; 12(4): 415-420.
- 14) 萩原琴美, 他. 現代の育児不安を考える 夫・近隣関係を通して. 福岡県立看護専門学校看護研究論文集, 1994; 17: 43-57.
- 15) Hughes RN, Hawkins AB. EPI and IPAT anxiety scale performance in young woman as related to breast feeding during infancy. Journal of Clinical Psychology, 1975; 31(4): 663-665.
- 16) Spielberg, Charles D., Richard I. Gorsuch, Robert E. Lushene. Manual for the State-Trait Anxiety Inventory. Palo Alto, CA; Consulting Psychologists Press. 1970.
- 17) Taylor, J. A. "A personality Scale of Manifest Anxiety." Journal of Abnormal Social Psychology, 1953; 48: 285-290.
- 18) Jeffrey S. Levin. The factor structure of the pregnancy anxiety scale. Journal of Health Social Behavior, 1991; 32(4): 368-381.
- 19) 高根芳雄. 多次元尺度法. 東京; 東京大学出版会, 1980.
- 20) 落合 薫, 山本 巧. 多次元尺度構成法によるラグビーポジションの認知構造の分析. 体育学研究, 1992; 36: 323-335.
- 21) 家田重晴, 他. 多次元尺度法を用いた保健行動の分類: 学校保健研究, 1993; 35: 333-341.
- 22) 西里静彦. 尺度法とその関連領域: 多次元尺度法の研究に関する最近の動向(2). 計量行動学, 1978; 5(2): 37-55.
- 23) Marija J. Norusis. SPSS Professional Statistics 6.1. Chicago Illinois, SPSS Inc. 122-155.
- 24) 杉山高一. 多変量データ解析入門. 東京; 朝倉書店, 1993.
- 25) 市川伸一, 大橋靖雄, 竹内 啓, 監修. SASで学ぶ統計的データ解析1 SASによるデータ解析入門. 東京; 東京大学出版会, 1988.
- 26) 平成6年度専門課程・専攻課程 合同臨地訓練報告書. 国立公衆衛生院, 1994, 2-1-2-13.
- 27) 島田三恵子, 日暮 眞. 特集 育児・新しい視点Ⅲ. 最近の育児に関する問題と対応 2. 育児不安, 小児科臨床, 46(4), 264-270, 1993.

INVESTIGATION OF FACTORS AFFECTING PSYCHOLOGICAL DEPRESSION IN CHILD-REARING MOTHERS

Yuichirou YAHATA* Eiichi HATA^{2*}, Chieko SATO^{3*}, Toshihiro IWANAGA^{4*}

Key words: Psychological depression, Scale, Factor, Multidimensional scaling

Child-rearing mothers ($n=1,459$) were surveyed by questionnaire in regard to their feeling psychologically depressed and for prevalence of some conditions in their life frequently referred to as affecting factors that may be related to the depression. A working scale of depression for this research was developed through a Multi Dimensional Scaling Procedure. Cronbach's alpha of this scale was as large as 0.77 and correlational coefficients of this scale between each question were greater than 0.46 and less than 0.70. This scale was considered sufficient for the purpose of this research to obtain depressive scores.

Coefficients in multiple regression analysis predictive for depressive score were obtained. Correlations were also calculated between depressive score and the factors stratifying by mothers' demographic factors. Out of a total 21.6 coefficients only 14 were greater than 0.30 and no factor showed coefficients greater than 0.80 through all the stratifications. None of the factors analyzed in this study appear to satisfactorily explain psychological depression. Therefore further search for real factors that affect the psychological depression in child-rearing mothers is required.

* Department of Public Health, Nagasaki University School of Medicine

^{2*} Department of Demography and Health Statistic, National Institute of Public Health

^{3*} Yachiyo City Health Center

^{4*} Department of Administration, National Institute of Public Health